

(旧・「京大上海センターニュースレター」)

京都大学経済学研究科東アジア経済研究センター

2010年9月20日

## 目次

- 中国自動車シンポジウム:中国自動車市場のボリュームゾーンを探る
- チベット問題への私的見解
- チベット自治区における企業活動の現状について(その1)
- 中日韓青年交流事業に参加して
- 【中国経済最新統計】(試行版)

主催

京都大学東アジア経済研究センター

共催

東京大学ものづくり経営研究センター

東京大学社会科学研究所現代中国研究拠点

京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター

後援

京都大学東アジア経済研究センター協力会

中国自動車シンポジウム

## 中国自動車市場のボリュームゾーンを探る

——小型車・低価格車セグメントにおける代替・競争構造——

2010年11月6日(土) 13時

京都大学百周年時計台記念館百周年記念ホール

総司会 京都大学大学院経済学研究科教授 梶山 泰生

13:00-13:10

挨拶 京都大学大学院経済学研究科長 田中秀夫

東京大学ものづくり経営研究センター ディレクター 新宅純二郎

13:10-13:50

京都大学大学院経済学研究科 教授 塩地 洋

新興国における小型車・低価格車セグメントの構造  
—全体テーマと報告構成—

### 第1部 非自動車セグメントのボリューム

13:50-14:20

エイムス ディレクター

菊地 捷

低速電気自動車の車体構造と普及の見通し

14:20-14:50

東京大学社会科学研究所 教授

田島 俊雄

「汽車下郷」と中国的農用車・微型車の命運  
—日本の「軽自動車」の再検討—

14:50-15:20  
inforBRIDGE 社長

繁田 奈歩

小型車中心のインド自動車市場  
—タタ・ナノの今後を探る—

## 第2部 日中韓自動車メーカーのマーケティング戦略

15:30-16:00  
明治大学国際日本学部 准教授

呉 在垣

現代自動車の現地適応戦略  
—エラントラが売れる理由—

16:00-16:30  
東京大学ものづくりセンター 助教

李 澤建

奇瑞汽車のマーケティング戦略

16:30-17:00  
日産自動車中国事業部 部長

西林 隆

日産自動車の中国事業戦略

17:00-17:05  
閉会

17:20-19:30  
懇親会（参加費無料） 於カンフォーラ  
司会 京都大学東アジア経済研究センター協会 理事 宇野輝  
開会挨拶 京都大学東アジア経済研究センター長 劉徳強  
閉会挨拶 京都大学東アジア経済研究センター協会 副会長 大森経徳

\*\*\*\*\*

## チベット問題への私的見解

15.SEP.10

中小企業家同友会上海倶楽部代表

東アジアセンター外部研究員(協力会理事) 小島正憲

### 1. もし私がダライ・ラマならば、即身仏になる。

私の家から、車で西方へ40分ほど走った山間部に、両界山横蔵寺がある。ここに有名な即身仏ミイラが安置されている。今から200年ほど前、横蔵の地に生まれた妙心上人は、37歳の若さで死を悟り、衆生の救済を願い、富士山麓の洞窟に籠もり断食し、さらに水を絶ち、30日後、生きながらに入定された。その後、妙心上人のミイラは、生誕の地の横蔵に移され、山間の素朴な寺の中に、舍利仏として祀られることになった。私はラサのポタラ宮の中の豪壮華麗な歴代ダライ・ラマのミイラの棺を見ながら、ふと横蔵寺の妙心上人のミイラを思い出し、帰国後すぐに拝観に行った。



《横蔵寺の舍利堂》

横蔵寺の舍利堂では、妙心上人のミイラをガラスケース越しではあるが、間近に見ることができる。私はそのお姿を拝観し、衆生の救済のため自らの命を絶った日本の仏僧のすがすがしさを感じた。横蔵寺のミイラは即身仏である。つまり妙心上人は自分の意思で生きたままミイラになったのである。

香港フェニックステレビの論説員の梁文道氏は、「今、問題なのは、ダライ・ラマを最も嫌っているのは北京中央政府ではなくて、チベット自治区政府の特にチベット人関係者だということです。彼らは、もしダライ・ラマが戻ってきて、チベットにある程度の自治がもたらされることになったら、自分たちの利益が損害を受けることを恐れている。また現在の時点で本当に困っているのは北京当局ではなくて、ダライ・ラマです。ダライ・ラマは存命中に問題を解決したがっている。というも、ダライ・ラマが亡くなれば海外のチベット独立運動には象徴がいなくなり、ばらばらになってしまうからです」(ふるまいよしこ著「中国新声代」集広舎刊 P. 158)と発言している。私は梁文道氏のこの視点は、現在のチベット問題を明確に描きだしていると考えている。しかもさらに切実な問題は、ダライ・ラマがすでに70歳を越え、死期を悟る年齢に近づいていることである。もしダライ・ラマがダラム・サラなどチベット外の地で死を迎えたならば、ダライ・ラマはミイラになってポタラ宮で歴代ダライ・ラマと共に眠ることはまず不可能であろう。チベット仏教の伝統を守るには、ダライ・ラマはミイラとなってポタラ宮に祀られなければならない。またダライ・ラマも切にそのことを願っているにちがいない。

ダライ・ラマは、「私は釈尊—その英知は完全にして無謬である—によって、初めて説かれ、さらには私たちの時代に至り、インドの聖者であり指導者であったマハトマ・ガンジーによって実践された、いわゆる“非暴力の教義”の、不動の信者である」(「チベット わが祖国」木村肥佐生訳 中央公論新社刊 P. 23)と語り、「武器を用いず、真実と不屈の決意という強力な武器によって自由と正義のために戦う」(「ダライ・ラマ自伝」山際素男訳 文春文庫刊 P. 417)と主張している。また彼はノーベル平和賞受賞時に、「この受賞を、非暴力という手段で変革を実践するという輝かしい伝統の創始者である、マハトマ・ガンジーに捧げます」(「愛と非暴力」三浦順子訳 春秋社刊 P. 1)とスピーチしている。これらの著述から、当然のことながらダライ・ラマの根本思想は、非暴力であるということが出来る。

ダライ・ラマは残された時間内で、非暴力を貫き、チベットに帰還し、ミイラとしてポタラ宮に安置されなければならない。現状の闘争方針のままでは、これは実現不可能である。私がダライ・ラマならばこの閉塞した事態を打開するために、ハンガーストライキ戦術を取る。もちろんそのハンガーストライキの結果、即身仏になることも辞さない。否、即身仏になることを目指す。そして同時にチベット内の多くの僧侶にハンガーストライキへの参加を促す。私は、「ダライ・ラマの取りうる最高戦術は即身仏になることを辞さないハンガーストライキである」と考える。そうすればラサに帰ることもできるし、ミイラになりポタラ宮に祀られるし、なによりも非暴力で戦いに勝つことができる。

ダライ・ラマ自身も、「チベット人一般大衆が、私に対して多大な信仰と希望を抱いているのは、周知のことである。私の方でも、これらチベット人の幸福のためなら、自分にできることはなんでもやろうと、覚悟を決めている」(「チベット問題」 山際素男著 光文社新書 P. 165)と、その決意のほどを語っている。また「私は、やがて死すべき運命の単なる人間であり、わが支配者の不滅の精神の一道具に過ぎない。それだから、死を免れ得ない人間の肉体一個の最期は、さほど重要な結果ではない」(前掲「チベット わが祖国」 P. 247)と、その死生観を語っている。

なお、私はチベット問題について語ろうとする者にとっては、阿部治平先生の大著「もうひとつのチベット現代史」(明石書店刊)が必読の書であると考えている。私は以下に、この阿部先生の書に、最大限の敬意を払いながら、私見を述べて行きたいと思っている。阿部先生は同著(P. 506)で、「あさはかなチベット認識はチベット人の生活や文化や仏教へのロマンチズムと同情心を生む。チベット人にガンジー的非暴力主義をとるようにと説いたり、チベット人地域を非武装地帯にしたらどうかと真剣に提案する人も出てくる。しかし、チベットの現状はかるがるしく発言できる状態にはない。…何かチベット人に忠告するような思惟や言動はなによりも非現実的である。そしてそれは少数民族には統治能力がないとか、はては迷信深い無知だの汚いものという偏見と紙一重である」と、主張されている。

この阿部先生の主張を熟読玩味した上でも、なお私はダライ・ラマに非暴力で戦い、即身仏になることを提言する。またその提言が、多くのダライ・ラマ尊崇者から、不遜であるという非難の声を受けるであろうことも覚悟の上である。さらに空理空論であるとの批判があるだろうことも承知の上である。それでもなお、私はダライ・ラマに即身仏になることを提言する。なぜなら私は、ダライ・ラマが死をも辞さない宗教家であり、彼がチベット人民を熱烈に愛しているリーダーだと確信しているからであり、ダライ・ラマが50年来の「守りの戦術」から、大胆な「攻めの戦術」に転換し、この戦いにおいて主導権を握らなければ、到底、現状は打破できないと考えているからである。

## 2. もし私がダライ・ラマならば、亡命しなかった。

1959年3月、ダライ・ラマはインドに亡命した。ほとんどの本が、このダライ・ラマの亡命について、疑問の余地のない行動として肯定している。今回のチベット調査旅行中、ふと私は「果たして、この亡命は正しかったのか。他に選択肢はなかったのか」と、疑問を持った。なぜなら私は若きころ、学生運動のリーダーの一員として多くの修羅場をくぐってきたが、そのとき常に自分に言い聞かせていたのは、「どんな事態になっても、体を張って部下を守り抜くこと」であった。そんな青臭い正義感を持っていたので、何度となく大怪我をしたし、死にかけたこともあった。もちろん大きな被害をうけたのは、わが組織が非暴力を旗印に掲げており、私たちは丸腰で闘ったからでもある。だから私はリーダーとしての自分の経験に照らし合わせて、ダライ・ラマが多くのチベット人を残して亡命してしまったことに、素朴な疑問を持ったのである。しかし同時に私は、ダライ・ラマほどの人物だから、きっと「確たる決意と巻き返しの戦略戦術」を胸に秘めて亡命したにちがいないとも思った。

私は日本に帰国して、ダライ・ラマ自身の言葉を記録した数冊の本を読み、その中で「亡命の理由と巻き返しの戦略戦術」に該当する箇所を必死に探した。その結果、どこにもそれらを見出すことはできなかった。それらに近い文言を以下に書き出しておくが、もし私がダライ・ラマならば、あの時点でラサに留まり、非暴力・不服従のマハトマ・ガンジーに倣って、ハンガーストライキで闘っただろう。もちろん多くの敬虔な僧侶を巻き込んで、一大大衆運動に盛り上げていったらう。残念ながら、ダライ・ラマは3月17日夜、変装してノル布林カ宮殿を抜け出し、インドへ向かった。ダライ・ラマの亡命後、ノル布林カ宮殿を取り囲んでいたチベット人たちは、中国軍に蹴散らされ、公式には「人民解放軍はわずか1千余の兵力で武装叛徒5300余人を殲滅し、うち545人を殺し、4800人を傷つけるか捕虜とした」(前掲 阿部著 P. 169)という結末を迎えたのである。ダライ・ラマの捨て身の亡命は、結果としてノル布林カ宮殿を取り囲んだチベット人を救うことはできなかったのである。私は、「亡命という行動が、本当にもっともよい戦略戦術だったのか」を、今、真摯に考え直してみるべきだと思ふ。

1910年、ダライ・ラマ13世は、清軍のラサ侵攻を前に、インドに亡命した。ところがこのときは、翌年に辛亥革命が起き、清朝そのものが自壊し始めた。ダライ・ラマ13世はただちにラサに戻り、清軍をラサから追い出し、1913年には独立を宣言した。ダライ・ラマ14世と彼を補佐するチベット政府高官たちには、おそらくこのときの成功体験が色濃く残っていたのではないかと。そして今回の亡命を、短期間で舞い戻ることが可能であり、一時的な避難程度に捉えていたのではないかと。ダライ・ラマ14世とその取り巻きは、亡命生活が半世紀を超えるとはまったく予想していなかっただろう。

現在、1959年のこの事態については、チベット人の階級闘争であり、ダライ・ラマが属する農奴主階級、腐敗した貴族や僧侶などが、人民解放軍に支えられた農奴や一般民衆に打ち倒され、結果としてダライ・ラマが亡命せざるを得なくなったという説が強い。そのような見方をすれば、放逐されたに等しいダライ・ラマが、ラサに帰ることを望む正

当性はないのではないか。

《ダライ・ラマ14世の亡命の理由》

- ・「1959年、われわれの歴史を通じて未だ経験したことがないほどの抑圧下にチベット全土が曝された時、私はついに亡命を余儀なくされたのである。チベットの民族と文化を守ってゆくためには、そうせざるを得なかったのだ」(前掲「チベット問題」P. 161)。
- ・「私が決心するに当たって、私が持っていた明確な世俗的指針がただ一つあった。それは、もし、私が留まることを決意すれば、わが国民や私のもっとも親密な友人たちの嘆きを、むしろさらに増大する結果になるであろう、ということであった。私は出発する決心をした」(前掲「チベット わが祖国」P. 248)
- ・「私はいま、静かに回想してみて、あの事件の瞬間から、私があのまま留まっていたとしても、わが国民のために、私ができることはもはや何もなくであろう。しかも、中国側は最後にはきっと私を捕えたことであろう。私にできることは、インドに赴いて、インド政府に亡命者としての保護を要請し、そしてインドにおいて、各地に散在するわが国民のために、希望の火が消えないよう、私自身、この身を捧げて専念することだけだった」(「チベット わが祖国」P. 268)。
- ・「超自然現象的な忠告はわたしの理論と合致していた。脱出だけが群衆を解散させる唯一の方法だとわたしは確信した。わたしが宮殿にいさえしなければ、人びとは外で頑張り通す理由がなくなってしまう。わたしは“お告げ”を受け入れることにした」(前掲「ダライ・ラマ自伝」P. 217)。

### 3. 2008年3月の暴動の真実の姿を明らかにすることが重要。

今回のチベット調査旅行では、ラサのセラ寺の奥深くまで入ることができ、110年ほど前に、日本人僧の河口慧海が修業したという僧院を見て回ることができた。僧院内の壁には、河口慧海の修行中の写真が掲げてあった。それを見て私は、彼の著作を読めば、当時のセラ寺の様子を知ることができると思った。私はただちに彼の「チベット旅行記」(全5巻 講談社学術文庫刊)を読んでみた。そして私はそこに、120年ほど前にラサで起きたある事件の記述を発見し、びっくり仰天した。その事件が、2年前の暴動とそっくりであったからである。それは第2巻のP. 184～186に記述してある。全文を引用したいのだが、長文になるので要約をして以下に記す。

「120年ほど前、ラサの商売はネパール人に牛耳られていた。あるとき、ネパール人経営の商店で、チベット族婦人が万引きの疑いをかけられ、辱めを受けた。それを耳にし怒ったセラ寺のラマ僧千人(後述の壮士坊主)ほどが、刀などを持ってネパール人の商店街を襲った。ラマ僧たちはネパール人の商店に乱入し、店を叩き壊し、商品や金銭を奪っていった。そのとき、ラサ市内にうろついていたチンピラも加わって、いっしょに乱暴狼藉、略奪を行った。その後、これが国際問題となり、チベット政府がその賠償をすることになり、しかもネパールの兵隊が24、5名、ラサに駐在することになった」

私は2008年3月のチベット暴動の真相を、「セラ寺などのラマ僧の一部の極左派が仕掛けた破壊活動に、チベット族若者の中のチンピラが付和雷同し、彼らが漢族商店の破壊、略奪、暴行を行った。それが武装警察や人民解放軍の大弾圧を誘発したもの」と、捉えている。これがあの暴動を、2年あまりの歳月をかけて調査してきた私の結論である(ただしこれは私見であって、今回の調査団の共通見解ではない)。なお暴動当日のラサの様子については、大木崇氏の労作「実録 チベット暴動」(かもがわ出版刊)を読めば一目瞭然であるが、残念ながらこの「貴重な歴史の生き証人」の本はあまり世間に認知されておらず、あの暴動の真相はいまだに誤解されたままであると、私は考えている。

もちろんラマ僧や若者の暴発の理由については、さまざまな見解があるが、起きた事態については、120年前の事件と同類であると考えている。今、中国政府にも肩入れせず、チベット人にも味方せず、色眼鏡を外して、あの事態を冷静に見直してみることがたいへん大事なことではないかと考える。

今回のチベット調査で、チベット仏教会の長老(活仏)たちと懇談する機会があった。私は居並ぶ活仏たちに、「なぜあのとき若い僧侶が暴発したのか」と質問してみた。活仏たちは、しばしの沈黙の後、互いの顔を見合わせながら、



なにやら協議を続けていたが、そのうち代表格の若い活仏がおもむろに口を開き、「多くの若いラマ僧が地方から、このラサに勉強に来ている。彼らは勉強が終わったら地方に帰らなければならないのだが、地方には帰りたくないでラサに留まっていた。その若い僧たちが不満を爆発させたのである」と答えた。さらに私は、「セラ寺では蜂起のため、若い僧の一部が武器を準備していたと言われているが、それは本当か」と、質問してみたかったがそれはやめた。なぜなら彼らから本当の答えが返って来そうにないと思ったからである。

私は、ダライ・ラマは「愛と非暴力」を掲げてノーベル平和賞をもらったほどの人物であるから、たとえ味方の陣営でも暴力を振るった輩については、破門に等しい態度を取るべきだと考えている。それが言行一致というものではないだろうか。しかしダライ・ラマは、「チベット青年会議」などの暴力を肯定している連中を野放しにしていた。つまりダライ・ラマには彼らをコントロールすることができない状態に陥っていたといえる。

今回、ダライ・ラマの自伝を読んでいて、1959年3月の暴動においても、同様の事態が起きており、ダライ・ラマが大衆をコントロールすることができない状態に陥っていたことがわかった。当時、ラサにはチベット東部のカム地方からの難民の流入が続いていた。すでにカム地方ではカムパ族と中国軍との激しい戦闘が開始されていたからである。カムパ族の一部はゲリラとしてカム地方の山中で戦っていた。まずカム地方で戦端が開かれたのは、中国軍にとってそこがラサへの進路であり、当然、平定しておかねばならない戦略的要地であったからである。しかし私は、それ以外にも大きな理由があったと考えている。

長征時、労農紅軍はこのカム地方を通り、このカムパゲリラに悩まされ続け、しかも彼らとの戦いでかなりの兵士が命を落とした。中国軍にはその怨念が残っており、まずこのカムパゲリラを掃討しようという狙いがあったに違いないと考えている。現在、日本でチベットの歴史を扱った本が数多く出回っているが、この長征時の労農紅軍とチベット族との戦いに言及しているものはほとんどない。私は一昨年以來、現地を歩いて、その痕跡を探し出し、自らの仮説を検証しようとしたが、おりからの地震で道路が寸断されていたり、暴動関係地域のため外国人の通行が禁止されていたり、現地に詳しい案内人がみつからなかったりして、断念せざるを得なかった。幸い今回の調査旅行のガイドが、カム地方出身者であり、長征時のことについても詳しい人物であったので、彼に頼み込み、年内に現地踏破調査を敢行することにした。

とにかく1959年3月時点で、ラサには1万人を超える難民が流入してきていた。その上、モンラム祭典に地方から参加し帰らないでラサに留まっていた僧侶や民衆が、数千人はいた。それらの大群衆が、ダライ・ラマを中国軍から守るという名目でノル布林カ宮殿を取り巻いたのである。当時の状況をダライ・ラマは、「そのときまでに離宮をめぐる雰囲気は極度に緊張していた。離宮の内壁の外には興奮して、怒りに燃えた大群衆がいた。彼らの大半は、棒切れ、鋤、ナイフまたは彼らが集め得たあらゆる武器で武装していた。彼らの中にはライフル銃、若干の機関銃、または14、5門の迫撃砲さえ持った兵隊たちやカムパ族たちがいた」(前掲「チベット わが祖国」P. 242)と書いている。そしてダライ・ラマはこれらの民衆の代表に会い、「代表全員に行動を思いとどませるように、最善を尽くして説得した」が、彼らはそれを聞き入れなかった。つまりこの時点で、民衆はダライ・ラマのコントロールが不可能な状態に陥っていたのである。ダライ・ラマの説く「愛と非暴力」の言葉は、怒りに狂った民衆の心には届かなかったのである。その結果、ダライ・ラマは亡命という戦術を取った。あのときダライ・ラマは、大群衆を破門し、毅然として「愛と非暴力」を貫くべきだったのである。

#### 4. チベット人企業家の育成。

今回のチベット調査団の団長の西大京大教授はチベット問題について、「チベットの問題は、この“企業家”に上昇できる者が少なすぎるため、“企業家は漢族”、“労働者はチベット族”というふうには本来は社会階級間の矛盾であるものが“民族矛盾”として現象してしまっているということにある」(「チベット問題とは何か」かもがわ出版刊 P. 37)という見解を公表している。私もこれにはまったく同感であり、チベット人の企業家の育成こそが、喫緊の課題であるという認識も一致している。当然のことながら今回の調査でも、チベットの企業調査がかなりのウェイトを占めていた。これらの調査結果については、西大教授や同行者の論考が、随時、京大:東アジアセンターのニュースレターに発表される予定なので、重複を避ける意味もあり、私の拙い企業調査報告は省略する。

私は日本の中小企業家として、「チベット人企業家の育成のために何ができるか」を考えてみた。チベットには宗教学は当然のことながら、それ以外に独特の医学・薬学・哲学・天文学などが発達している。したがってこれらを企業化することがまず近道だと思う。

たとえばラサ市内では、冬虫夏草の商売を行う店や回族商人がきわめて多い。一昔前、馬軍団という陸上競技チームが一世を風靡したとき、そのスタミナ源としてこの冬虫夏草が紹介され、一度に有名になった。私もこのとき、この名前を知った。またマラソンなどの競技には高地トレーニングが有効だということは論を俟たない。したがってラサではちょっと高すぎるかもしれないが、競技トラックや宿泊施設を作って、冬虫夏草と共に売り出したらどうだろうか。

ラサにはポタラ宮などの観光資源も整っているから、観光事業も有望である。最近では青蔵鉄道ができ観光客が増えている。今回、私たちはチベット第2の都市シガツェにも足を運んだ。その途中には息を呑むほど美しいトルコブルーの湖があった。氷河も見ることができた。これはすばらしい観光資源である。しかしチベット観光には致命的なネックがある。高山病である。ほとんどの人がこれにかかる。今年も日本人観光客が6名、すでにこれで命を落としていると

いう。私はこれを逆手にとって、チベット医学とセットにした観光旅行を企画したかどうかと思う。病院兼用のホテルを建て、ラサに到着したら、すぐそこに入院し、医者に診てもらい、高山病対策を行う。同時に他の病気も発見してもらう。観光兼簡易人間ドックというわけである。身体頑健で自信満々の人でも、高山病には勝てないので、ラサに入ったら必ず2日間ぐらいは、どうせホテルでゴロゴロして体を慣らさなければならないのである。この間を利用して人間ドックを行えばよいと思うのだが、いかなるものであろうか。またチベット薬学を応用した薬で、現代病に挑戦してみるのもおもしろいのではないか。

現在、チベットに日本料理屋はない。ラサには年間、かなりの数の日本人観光客が訪れている。そして日本人は一樣に高山病に苦しむ。彼らが慣れない中華料理やチベット料理を前に食欲不振となっているとき、美味しいうどんやソバに出会ったら、日本人は生き返ると思うのだが、いかなるものだろうか。だれか日本の観光業者と提携して、日本料理屋を始める人はいないだろうか。いずれにせよ、私のような今にも潰れそうな中小企業経営者が考えていても、それは“ごまめの歯ぎしり”程度にしかならない。ここは世界平和のために、トヨタを始めとする日本の誇る巨大企業に、採算を度外視してでも、お出ましを願いたいものである。

## 5. 僧院の実情と改革の必要性。

私は若いころ、1週間ほど禅寺に寝泊まりしたことがある。またその後も座禅を組んだり、禅寺の食事作法に従い精進料理を食べたりした。高野山に霊媒を訪ねたこともある。日本の名僧100人の「遺喝の書」を研究してみたこともある。インドの仏教の聖地を巡礼し、ベナレスで沐浴もした。またヨガ道場で1週間の断食に挑戦したこともある。現在、松村先寧雄先生が仏教の曼荼羅に着眼し、そこから案出されたマンダラチャート思考法の研究も行っている。これらの体験から私が見つかったものは、清廉・静寂・清潔という仏教イメージである。

かつて私は青海省のラプラン寺を訪ねたとき、ちょうど祭礼にぶつかり、それを見学したことがあったが、そのとき僧院の入り口に、僧侶の百足近い靴が乱雑に脱ぎ捨てられている光景を目にして、びっくりしたことがある。まさにそれはカルチャーショックだった。今回も、ギャンツェの白居寺の中で、乱雑に脱ぎ捨てられている法衣を見て、同様に驚いた。またどの僧院でもラマ僧は体を揺り動かしてお経を唱えており、何回見てもそれにはなじめない。日本の僧侶は、背筋を伸ばし微動だにせず、読経を行うからであり、それが仏僧に対する私の固定イメージになっているからである。

また今回、僧院の出入り口近くで、信者や礼拝者の目をまったく気にしないで、一生懸命お賽銭の勘定をしている若い僧侶を見た。また僧院の中庭で、談笑しながら、ペッと痰を吐く若い僧侶の姿も見た。総じて僧院は汚く、トイレは鼻をつまんで大急ぎで用を足さなくてはならないほど汚かった。これらは清廉・静寂・清潔というイメージとは程遠いものであった。日本のお寺では、僧侶の修業の基本はトイレ掃除である。これが一般社会にも広まり、「社長が率先してトイレ掃除を行う会社は、繁盛する」という思想まで生まれているほどである。また日本の僧侶は率先して、地域の清掃などの奉仕活動なども行う。チベットの大方の僧院の周辺にはゴミが散乱しており、僧侶たちが清掃活動にいそしんでいる光景などついで見かけなかった。

日本とチベットでは、国情や国民性、風俗習慣などがまったく違うのだから、僧侶の生活を比較することは無意味である、そうやって物事を片付けてしまうこともできる。それでも私は、同じ仏教にその源を持ちながら、なぜこれほどにその姿が隔絶したものになってしまったのかと、素朴な疑問を抱かざるを得なかった。私は、この疑問を解くためには、どこかの僧院内で、若い僧侶たちとしばらく起居を共にして、その生活を垣間見てみる必要があると思った。また昔の僧院はどうだったのだろうか、ひょっとしたら僧院が荒れ、汚くなったのは文革以降のことではないだろうか、などとも思った。

そこで私は、昔の僧院の状態を知るために、河口慧海が書いた110年ほど前のセラ寺についての記録を読んでみた。河口慧海は「チベット旅行記(三)」で、当時のラサ市内やセラ寺について、きわめてリアルに描いている。たとえばラサ市内には、人糞がいたる所に溜まっており夏場は臭くてたまらないとか、僧侶を含めてほとんどの人が用を足しても手を洗わず、またその手でツァンパ(チベット人の主食の裸麦の粉から作るダンゴ)を握って食べるとか、その不衛生なことを書き立てている。

中でも私が注目したのは、僧侶に大きく分けて二つの種類があり、その一つは修学僧侶で、もう一つは壮士坊主であるという記述であった。共に地方の僧院からラサに出てくるのだが、修学僧侶とは学費や教材費、家庭教師代、宿舍費などが払える層であり、彼らはセラ寺でおおむね20年の修行を積んで、相当の地位となり自分の寺に帰る。もちろん長期にわたる学習に耐え切れず落ちこぼれる僧侶もいるが、その場合でもたいていは金を積んでその地位を得るという。問題はもう一方の壮士坊主である。彼らは修学資金をまったく持たずに地方から出てくるので、まずラサでア



《ラプラン寺:僧侶の脱ぎ捨てた靴》



《白居寺:脱ぎ捨てられた法衣》

アルバイトしてその金を稼がなければならない。彼らは修学僧侶や高僧の下僕や警護役になったり、僧院内の供物の整理、僧院の楽隊、田畑の耕作などを受け持っており、そして暇な場合は、山の中へ入って体を鍛えることに専念しており、そこではしょっちゅう喧嘩が起きるといふ。結局、壮士坊主はアルバイト稼業に明け暮れてしまい、まともに学業を身につける者が少ないと、河口慧海は記述している。

さらに河口は、ラサで最大のモンラムという祈祷会の際には、ラサ中に泊まっている2万5千人ほどの僧侶が集まってくるが、本当の僧侶というような者は誠に少なく、壮士坊主とかあるいはそこで振舞われるバター茶が目当てで来る僧侶が多いと書き、だからお経を読むのではなく、鼻歌なんか歌う奴もあればあるいはその中で腕相撲などを取っている奴もいるという。

私は河口慧海のこれらの指摘を読みながら、それは現代にも通じており、かつての壮士坊主に匹敵する輩が、2年前の暴動の主演を演じたのではないかと思ひ、現在の僧院内の僧侶の状況を記述した本をくまなく読んでみた。しかしその解答をみつけることはできなかった。やはり僧院で泊り込み、若い僧侶と生活を共にする以外に、若い僧侶の暴発の真因をつかむことはできないと思つた。しかし今回の調査団では日程の問題もあり、なおかつ個人行動は慎むべきだったので、それは不可能であつた。そこで私は、まず今回、なにかの仕掛けをしておき、次の機会にそれを実現しようと思つた。

## 6. チベット民族文化の保存。

今回の調査旅行では、ラサ入りした日から3日間、ヤルツァンポ大酒店(雅魯藏布大酒店)に宿泊することになっていた。このホテルが高山病対策では、ラサ市内でいちばん優れているということだったのである。同時にこのホテルは、博物館が併設されていることでも有名であつた。かつて日本のNHKテレビでも、このホテルのことが放映されたといふ。私は滞在中、このホテルの2階にある博物館をじっくり見て回つた。そこには国家2級文物に指定されている仏像や法器、骨董品、民具、宝石、祭礼用の面や衣類、マニ車、古刀、古銃などが、数多く陳列してあつた。これらの展示物は、このホテルのオーナーがチベット各地の民間から、コツコツと買い集めたものであり、宿泊客の中の購入希望者には販売もするといふ。

私の目には、他の公的博物館に勝るとも劣らない逸品が並んでいるように映つた。ひょつとしたら文革期に僧院から盗み出されたものが、民間に隠されており、それがオーナーの手に渡つたのではないかと、勘繰つたりもした。売り場の担当者のお話では、展示物はそこそこ売れているようで、いずれにせよこのままではこの博物館に陳列してある仏像や宝物は売却され、世界各地に散逸してしまうのではないかと思つた。

それらの展示物を見て回つていたとき、私の目に一つの異様な仏頭が飛び込んできた。売り場の担当者に詳しいことを聞いてみると、それは活仏のしゃれこうべを利用した法器であり、頭頂部を開けてそこに酒を入れて、仏前に供えるもので、金剛頭と呼ばれているといふ。私はガラス越しにじつとその金剛頭を見続けた。翌日もその場所に行つて、金剛頭と無言の対話をし続けた。そのうちふとその金剛頭が私に、「自分の寺に帰りたい」と語りかけているような気がした。そこで私はその金剛頭を買い求め、それが使われていた元の僧院を探し出し、そこへ寄託しようと思ひ立つた。これだけの逸品ならば、それは可能ではないかと思つた。そして同時にその手づるで、その僧院へ潜り込み、しばらくそこで若い僧侶といっしょに修業させてもらおうと思つた。そうすれば若い僧侶たちの考えがはつきりつかめると思つた。

その金剛頭は、なかなかの値段で、博物館側もおいそれと値引きはしなかつた。数日間にわたる幾度かのきびしいやり取りの結果、交渉は成立した。私はその金剛頭をあらゆる角度から何枚もデジカメに収め、その出身寺を探すために、その画像を関係者に見せたが、それは簡単なことではなかつた。時間も限られていたので、私はどこの僧院でもよいので、とにかく預かってもらおうと決め、仏教協会にその旨を申し出た。ところがそれはあっさり断られた。仏教協会には今までにこのような申し出も多く、これで5回目だといふ。そしてそのすべてを断つてきたといふ。どうやら仏教協会はそれで贈収賄関係ができるのを嫌っているように感じられた。結局、私のたくらみも見透かされたような感じであつた。現在、私はその金剛頭を、オープン間近の北京の西藏文化博物館への寄託を申請中であり、北京の友人宅に預かってもらっている。

この金剛頭は、もし私の目に飛び込んで来なかつたら、おそらくどこかの誰かに買われて、寂しくチベットを離れていったことだろう。私は日本や中国のお金持ちが基金を作つて、ヤルツァンポ大酒店の展示物を買ひ占め、それをそれぞれの出身の僧院に戻して欲しいと、心から願う。そうすればチベットの文化財の散逸が防げるのではないか。私がそのようなヤワな考えを博物館の担当者にお話すると、彼はにやりと笑い、「その僧院の僧侶たちは、またこっそりそれを売りに来るかもしれませんよ」と、言つた。

チベット文化財の保護と同時に、日本人の私たちがしなければならないことは、チベット文化を日本に紹介することであると思ふ。私は今、チベット人哲学者プンツォク・ワンギェルの著書を翻訳してもらっている。私は阿部治平先生の名著「もうひとつのチベット現代史」(明石書店刊)で、プンツォク・ワンギェルのことを知つた。その本を読んで、彼の数



奇な運命に感動すると同時に、彼が獄中で「弁証法新探」という書物を著したというくだりに強く惹きつけられた。阿部先生によれば、このプンツォク・ワンギェルの本は、あの深遠なチベット哲学とヘーゲル哲学、そしてマルクス主義を融合させた最高傑作であるという。さらにプンツォク・ワンギェルは毛沢東やダライ・ラマからも深い信頼を勝ち得た人物であり、あの「17か条の調印」のときの通訳の重責を果たした人物だったという。私はそんな立派な人物が著したこの書物を、ぜひとも日本語訳で読んでみたいという強い衝動に駆られた。さっそくその本を取り寄せ読んでみたが、さっぱりわからなかったのが、現在、阿部治平先生と大西広教授の力に全面的に依存して、この書物を翻訳している。もちろん完訳後には、出版するつもりである。おそらくこの本は、たいして売れないだろう。しかし日本にチベット文化の高い水準を紹介することはできると思っている。以下にダライ・ラマ自身のプンツォク・ワンギェルへの高い評価を抜書きしておく。なおプンワン氏は北京で存命中である。

- ・「プンツォク・ワンギェルは中国語を自在に操り、毛主席とわたしの素晴らしい通訳を務めてくれた。彼は非常に有能で、物静かで賢明な、思慮深い人物であった。また実に誠実かつ正直な人柄で、一緒にいてとても楽しかった」  
(前掲「ダライ・ラマ自伝」P. 146)
- ・「わたしはプンツォク・ワンギェルを党書記としてチベットに配属するよう要望した」(同 P. 181)
- ・「もうずいぶんの年だが、プンツォク・ワンギェルはまだ健在だ。亡くなる前にぜひもう一度会いたいと思う。経験豊かな老チベット人コミュニストとしてわたしは今も彼を高く評価している」(同 P. 182)

## 7. 文化大革命期の清算。

「私は学生時代、日本で、文化大革命に翻弄された」と、私が中国人に話すと、ほとんどの相手が目を丸くする。現在、中国には文革の被害者と加害者が同居し合っている。彼らは罵りあい、殴りあい、殺しあった仲である。私も日本で殴られた。その恨みは今でも忘れない。中国では人民大衆の中にも、指導者の中にも、この憎しみが沈殿している。

チベットも例外ではなく、文革期には大混乱に陥り、チベット人同士が敵味方に分かれて戦った。ラマ僧たちの中には、この文革期に三角帽子をかぶされ、市内を引き回され、命を落としたものもいる。残念ながら、日本で発行されているチベット関連本には、この文革期のチベットの状況を詳しく報じたものは少ない。今回、私は活仏たちに、「あなたたちは文革期を、どのように過ごしていたか」と、短刀直入に聞いてみた。比較的若い活仏が、「私は15歳だった。下放されて地方の農場に行っていました」と答えた。私は彼の隣に座っていた老齢の活仏の返答に期待していたが、彼は微笑を浮かべただけで何も答えなかった。私は彼もきっとひどい仕打ちを受けたのだろうと思ったが、彼がかもし出す穏やかな空気から、私の質問(詰問)には、彼は微笑みしか返さないだろうと悟り、それ以上の質問をやめることにした。

今回の調査旅行では、高山病に備えて、ラサに入ってから丸2日間の休養かつ禁足期間が設定してあった。私はこのときの退屈しのぎのために、10冊に及ぶチベット関連本を持っていった。その中の1冊に、「殺劫 チベットの文化大革命」(ツェリン・オーセル著 藤野彰・劉燕子訳 集広舎刊)があった。昨年買っておいたのだが、分厚い本で、しかもタイトルが劇画的だったので、まったく手をつけていなかった。深夜、頭が痛くて眠れなかったのが、小型の酸素ボンベに口を当てながら、この本を開いてみた。そしてしばらく読み進めて行くうちに、この本に吸い込まれ、頭の痛さも酸素ボンベのことも、すっかり忘れてしまった。この本は、私が今まで読んできた数多くの文革関連本の中でも、最高傑作の部類に入る。

著者のオーセルの父親は写真家であり、文革期のチベットの人間模様をくまなく画像として残した。本文中には、三角帽子をかぶされ、ジェット機の格好をさせられた被害者のラマ僧やインテリ分子、その側で棒を持って殴りつけている加害者の紅衛兵や翻身農奴、また寺院を破壊している紅衛兵の姿など、無数の写真が掲載されている。これほどの写真が残されていたことに、私は驚きを感じると同時に、文革の生の姿を残してくれたオーセルの父親に心の中で手を合わせた。

しかもさらに驚いたことは、オーセルがこの写真を証拠として、そこに写っている人物を丹念に尋ね歩いたからである。すでに死んでしまった人、自分の行為に類かぶりをした政府高官になっているもの、自分の行為を恥じて仏門に入ったものなど、この本の中で彼は、それらの人の実名を明かして追及している。これだけの証拠が揃っていても、現在のチベットでは文革期のことを総括しようとする機運は生まれていない。私は、加害者は被害者に人間として謝罪すべきであると考えているし、寺院を破壊したり宝物を略奪したりした人間は、私財を投じて償うべきであると考えている。あの文革期には中国全土でこれと同じ現象が起きていた。日本でも起きた。せめて仏陀の精神が色濃く残るチベットだけでも、文革関係者は自分の行為を懺悔してから死の床につくべきではないか。もちろんあと20年もすれば、文革期に生きた人間は死んで、この世から消えてなくなる。しかし当事者たちが、しっかり自らの愚挙や暴挙を反省しておかねば、再びそれが起こる可能性がある。

もちろん文化大革命にも、光の部分と影の部分がある。最近、「文化大革命を権力闘争の面からだけではなく、階級闘争の面から見なおす」、あるいは「文化大革命は、人間発達の重要な一部分であり、文化大革命はそれを担っていた」また「文化大革命がインフラ整備など、中国経済に与えた影響を再評価すべきである」、さらに「一般大衆の文化財の破壊活動などは、毛沢東の文革思想とは相反するものであった」などの見解が出てきている。残念ながら私は文



革の当事者＝被害者であるため、どうしても文革を怨念の立場から見ってしまう。そろそろ文革を第三者の目で、冷静に見ることが必要なのかもしれないと思っている。

以上

\*\*\*\*\*

## チベット自治区における企業活動の現状について（その1）

GCOE 研究員

吾買尔江 艾山（オマルジャン ハサン）

### はじめに

私たち 10 名からなる研究グループは、2010 年 8 月 10 日～8 月 24 日の間、京都大学大西教授の企画による「中国チベット自治区社会経済調査プロジェクト」に参加し、チベット自治区の社会・経済・文化各方面についての調査を行った。これは日中友好協会の代表団として昨年大西教授が中国国際交流協会を訪問したことを契機として企画されたものである。

ラサの最初の印象はやはり綺麗な街並みであるということであった。現地のガイドは 1959 年当時はラサ市内ではまともな道路はラサ市内のロ布林カからポタラ宮までの一本しかなかったと述べたが、チベット、特にラサの今日の街並み、空港、チベット鉄道、溢れている旅行者など発展ぶりを生の目で見て、政府がチベットの経済開発にどれほど力を入れているのを感じられた。今回は北京市にあるチベット学研究中心、仏教協会、承德市にあるチベット仏教の幾つかのお寺、そしてチベット現地ではチベットの宗教、文化、社会・経済関連の施設・機関を訪問したが、特に、チベット自治区ラサ市に位置する中型企業 8（内一つは事業単位）社を調査できたことは私の研究上も非常に有意義であった。うち 4 社は現地チベット族経営企業であり、4 社は漢族経営企業であった。8 社の概要は表 1 を見られたい。

調査は直接企業に訪問し、企業の経営者、従業員からの報告を聞いて質疑応答をするという形で行われた。ここではその結果を報告したい。そして、中国で公表されている集計データに基づきチベットの企業家活動についての所見を述べたい。

表 1 8 社企業の状況

	設立年月	経営トップ	所有形態	業種	従業員数(人)	チベット族従業員比率	部門經理のチベット族比率	平均賃金
ヤルツァンボ大酒店	2006	漢族(四川人)	私有	ホテル業	148	70%	2/10	1500
シャンバラ酒店		チベット族	私営	ホテル業	60	90%		1500
チベットハダカムギビール	2010.5	漢族	国有 30	ビール製造	120	80%以上	3/8	2500~3000
チベットラサビール	2003	漢族	中外合資	ビール製造	420	80%	3/7	3000~3500
チベット特色産業	2003.7	チベット族	私営	健康食品	550	80%	8/10	2000
チベット隆鑫科技開発	2003.1		国有	野菜		95%	60%	2000~3000
チベット奇聖食品	2003.3	漢族	私営	食品加工	110	90%	いる	
チベット自治区蔵薬工場	1969	チベット族	事業単位	チベット薬	400人以下	大多数蔵族	95%	2000

## I. チベット文化を再現したホテル業

### 1. ヤルツァンボ大酒店(雅魯藏布大酒店)

ヤルツァンボ大酒店(ブラマプトラグランドホテル)はチベットにある八つの四つ星ホテルの一つである。

ネット上ではこのホテルは五つ星、また四つ星ホテルがチベットに 24 もあると書かれているが、われわれが面会したホテル副総経理の侯氏(チベット族)によると現在はまだチベットには 5 つ星ホテルはまだなく、来年ようやく幾つかのホテルが 5 つ昇進するということである。しかし、このヤルツァンボ大酒店は他のホテルに比べて別格で、現在のラサでは最高級ホテルであると明言することができる。というのは、漢族董事長の張曉宏氏のアイデアによりデザインされた世界初の博物館式のホテルであるからである。ここではもちろん、チベット文化をテーマとしている。五つ星ホテルに常備のプールこそなかったものの、重要な施設としては高山病対策のクリニックが 24 時間体制で稼働しており、旅行社が安心して観光客を宿泊させられる対策がなされていることである。もちろん、室内のネット接続も可能であった。

総経理の張氏は以前四川省を中心にスーパーマーケット業をやっていたが、84 年にチベットに進出(北京東路に面した大きなスーパーで 08 年の暴動時に集中的な焼き討ちに遭う)。その後、青蔵鉄道開通による観光需要の急拡大を予測してホテル業に関心を持ったという。当時は 4 つ星ホテルがチベットにはまだなかったので、初の 4 つ星ホテルを目指したという。ただ、ホテルの建物自体は北京市朝陽区が作ったもので、張氏はそこから長期的な経営を請け負ったものである。そして、氏はチベット各地の民間の民族工芸品を集め、それを 2 階の特別室や 1 階ロビー、それに廊下などに綺麗に並べて宿泊客に販売することから事業を始めている。何と開店した初年でさえ、この展示品販売で 80 万円の売り上げを実現し、我々の調査団もかなり高額な骨董品を 2 点購入した。空になったショーケースもいくつも見られ、販売が続いている様子も見受けられた。ともかく、これが本ホテルの特徴となっている。

また、客室は 185 室あり、ホテルが開業した 05-06 年頃は国外からお客が 80%を占めていたものの、金融危機やオリンピック、上海万博もあり、2007 年以降は国内客が 60%を占めるようになったという。また、08 年には暴動のために観光客が急減したが、09 年からはそうした国内客でしっかり回復しているということであった。

しかし、ラサでのこの最高級ホテルに対する我々の関心は従業員の労働条件である。このホテルは 2008 年に NHK スペシャルが報道した際には、チベット族演芸員の働きが悪いと減給・解雇が言い渡され、それが元(下)で一種の労使紛争があったと言われていたからである。このことはヒアリングの際に副総経理に確かめたが、「そんな報道もあったが、労使関係に問題はない」とのことであった。経営側の言うことなので、そのまま信じることはできないが、平均賃金は 1500 元、高い場合は 1800-2000 元で、ベッドメイカーでも 1000 元程度で毎年上っているというから一般的な労働条件はよい。そして、その上に、宿舎と 3 食と休暇が保障されているというから、私の印象でも労使の対立は感じなかった。

なお、ホテルの従業員は 148 名で、うち漢族が 30%を、チベット族が 70%を占めており、10 人いる部門経理のうちの 2 人はチベット族となっていた。私たちが関わったホテル芸術館の部門経理は二人ともチベット族であり、かなりの決定権を持っていた。副総経理も母親がチベット族で戸籍をチベット族としていた。また、ホテルで働いている漢族はほとんどが四川省からきたものでホテルの受付、接客、診断所、ホテルショップなどの部門で働き、ベッドメイクやレストランのウェイトレス等をチベット族が担っていた。

## 2 シャンバラホテル(香巴拉酒店)

我々は漢族経営の最高ホテルとしてのヤルツァンボ大酒店との対比も兼ねて、チベット族経営の最高のホテル(三つ星級)であるシャンバラホテルにも宿泊し、状況を調べた。このホテルは立地条件がよく、大昭寺には 50 メートル、北京東路には 100 メートルの距離にあり、一部の客室の窓からはポタラ宮が見えるというものであった。

しかし、ホテルの設備は古く、ヤルツァンボとの差は歴然としている。というのは、まずは高山病対策がなされておらず、ヤルツァンボでは各部屋にあった酸素もおかれていない。室内でネットの接続ができない。一部の部屋ではトイレに虫がいる、ということがあった。ホテルに聞くと、夏でさえ酸素が平地の 65%しかないものが、冬には 45%までさらに少なくなり、観光客はほぼいなくなる。そのためホテルの稼働率が悪く、修理コストが払えないということであった。ただし、繰り返すが、これはチベット族経営のホテルとしては最高級のホテルでの話である。

したがって、ホテル総経理はチベット族であるが、彼は実は甘肅省甘南チベット族自治州の出身で、当自治州合作市や蘭州市のホテルがその本拠地である。この三カ所のホテルともに「チベット文化主題ホテル」としてチベット式のホテル・グループとしている。総経理がここラサのチベット族でないのが、残念であるが、副総経理も漢族であった。また、従業員は 60 人で、90%はチベット族であった。平均賃金は 1000 元前後ということでヤルツァンボ・ホテルより低い。副総経理の話では当初ネパール人の従業員を 10 人程度雇っていたが、それは彼らが英語が堪能だったためで、以前は多かった外国人観光客の接客等の仕事をしてきた。現在もまだ何人かは働いているが、西洋人観光客の急減で、この需要は縮小せざるをえないだろう。ヤルツァンボ大酒店では英語の接客は漢族が行なっていたので、英語のできる従業員を漢族から雇うのか、ネパールから雇うのかは総経理の民族によるものかも知れない。

## II. チベットでもっとも人気のビール生産企業 2 社

### 3 チベットハダカ麦ビール有限公司（西藏青稞啤酒有限公司）

この企業は世界で唯一のハダカ麦を原材料としてビールを造る会社である。ハダカ麦はチベットの農業地帯を代表する主要農産物として大量生産ができ、ミネラルウォーターの質も高いということで(説明では「水の質が非常に重要」とのことであった)、こうした農業資源と自然資源をうまく利用して競争力のある企業を目指しているということであった。我々は試飲もしたが、味が濃く、通常のビールと確かに異なっている。この味はまだ大衆(的)に受けているわけではないものの、「世界唯一のハダカ麦ビール」と銘打てば観光客に受けるのではないかと思った。

この企業は資金の 30%が国有で、70%は自身で調達したという。というか、中国の企業は現在非常に複雑で、このビールのリーフレットも「西藏青稞啤酒有限公司」と「西藏天地綠色飲品發展有限公司」というふたつの製造業者となっていて、厳密にはこの後者の有限公司が前者から 70%の資金を、国有の「西藏国有投資公司」から 30%の資金を得て設立されている。ドイツの Kronen ビールから醸造設備を輸入し、Steinecker の麦汁及びビール濾過技術を用いているという。2009 年 8 月に開業し、2010 年 5 月から生産し始め年産量は 20 万トン=5000 万元に達する予定という。

ここのビールはチベット自治区内だけではなく、成都、広州、上海等の内地の都市へ(で)も生産量の 20%が出されていて、ほんの一部ではあってもアメリカにも輸出されているが、それ以上に興味深かったのは、上海万博のオフィシャル・ビールとして売られており、出荷は青蔵鉄道を通じて行なわれているという。青蔵鉄道は観光客の受け入れのためだけに使用されているのではなく、こうした「輸出」にも利用されているというのが興味深かった。また、将来は 6-7 割程度を内地と外国に輸出したいということであった。なお、チベットにはこれもハダカ麦で作られた伝統的なお酒「チャン」があるが、最近ではチャンよりもハダカ麦ビールが好まれているそうである。

総経理と董事長は漢族であるが、副経理が 6 名おり、内 3 名はチベット族である。我々に説明をしてくれた董事もチベット族であった。また、従業員は 120 人で、内 80%以上がチベット族であった。何かチベット族を雇うよう導く法律などがあるかと聞いたがそれはないということであった。労働者はチベットにある労働技術専門学校から選んだということであるが、チベット族も全員(が)漢語ができ、複数民族が混在することの問題はないとのことであった。

また、平均賃金は 2500~3000 元と驚くほど高い。同行した中小企業経営者も驚いておられた。後で述べる政府の優遇政策の結果であろうか。これは、武漢あたりの賃金よりも高いという。そして、これら従業員は元の工場(後述のチベトラサビール株式有限責任公司)で 3 ヶ月間訓練を受け、後 3 ヶ月間沿海部等のビール会社に送り込み訓練を受けるといふ。

原料については、質の高いハダカ麦を生産する基地もちゃんと作っている。すでに 1000 戸以上の農民家庭と契約しており、注文式でハダカ麦が生産されている。これらの結果、ハダカ麦の価格が最初の 1 キロ 0.8-0.9 元から 2.8~3 元まで値上げし、農民の収入増に貢献しているということであった。

政府はこの企業に対して、企業の営業税、増値税、所得税を三年間免除してくれている。その理由は、この企業がチベット経済技術開発区に立地しているということと、農産物加工で地元農民に貢献していることだといふ。つまり、二重の優遇措置をとってもらっているということである。調査対象となった別の企業も異なる程度で政府税制面での支援を受けていた。

### 4 チベトラサビール有限責任公司(西藏拉萨啤酒有限公司)

他方、先の「西藏青稞啤酒有限公司」の設立者の「西藏拉萨啤酒有限公司」をも訪問した。開発区ではなく、旧市街にある古い建物で、日本の感覚からすると衛生管理に不安を感じたが、とにかく稼働したばかりの「西藏青稞啤酒有限公司」とその設立元の両者を見くらべられたのは良かった。両者は同じグループ企業として、統一管理、統一戦略、統一販売ルートを用いているが、作られている製品が違っているということになる。つまり、「西藏青稞啤酒有限公司」はハダカ麦ビールを、この「西藏拉萨啤酒有限公司」は普通のビールを作っている。

両者のビールは価格はかなり違っている。逆に言うと、先のハダカ麦ビールはバーやレストランなどの市場を当てにしたもので、こちらはもっと一般大衆向けということである。実は一般のチベット人もこちらの味の方に親しんでいるということで、これは試飲した我々にも分かった。また、価格の違いは、こちらのビールはハダカ麦より原料が安だけでなく、設備も古いのを使える、ビールビンも回収したものを使えるので安いということである。原料の大麦は 40%をオーストラリアから、60%を甘肅省から、また大麦と同時に使う米は江蘇省や成都からということである。運送費はこちらの方が高いはずが、それでもハダカ麦の方が高いということであるから、チベットは農産物も非常に高く買い取られているのではないだろうか。麦芽は山東省

の煙台で作られているという。なお、賃金についてはこちらの方が設立本社なので高く 3000-3500 元程度であるが、労働密度が高いのでビールの価格に問題はないとのことであった。

こうしてこの企業は「西藏青稞啤酒有限公司」より古いものの 2004 年に初めて生産を開始したまだ数年の企業である。チベット銀河科技發展株式有限公司が 50%、デンマークのカールスバーグ国際有限公司が 33%、またデンマーク發展途上国工業基金が 17%を投資して設立された外資導入のベンチャー企業である。さらに遡れば、チベット銀河科技發展株式有限公司は元々内地でビール製造と娯楽施設営業を行っていた銀河科技發展株式有限公司がこちらの国有企業とともに 1988 年に設立したもので、1989 年に生産を開始した当初はチベット唯一のビール生産工場であった。それが、2003 年?にデンマーク中国友好協会の視察を機にカールスバーグ社との合弁の話が出て、2004 年 8 月に「西藏拉萨啤酒有限公司」となったものである。カールスバーグ社の技術を使って年間生産能力は 15 万トンに達している。

経営層については、以上の経過からカールスバーグ社からも経営陣に 2 名が入っているが、「銀河」の側も入るので総経理は漢族であり、チベット族は高級幹部 7 人のうちの 3 人、中級幹部 20 人のうちの 60%となっている。全従業員では 420 人の内の 80%がチベット族となっている。なお、当日渡された 2005-6 年頃発行の企業紹介リーフレットでは従業員が 247 人、そのうちの 70%がチベット族と書かれていたので、企業は急速に発展しており、その中でチベット族従業員の比率が上がっている。青蔵鉄道開通後の観光客の急増とチベット経済の加速的な発展と軌を一にしているものと思われる。

(その 2 に続く)

\*\*\*\*\*

## 中日韓青年交流事業に参加して

京都大学経済学部 3 回生 井上雄介

### はじめに

2010 年 7 月 20 日から 27 日の間、私は中日韓青年交流事業に参加いたしました。参加する前から、劉徳強先生の「東アジア経済論」を始め、多くの大学の授業や、個人的に、社会人の方から中国についての話を聞いていました。中でも先生の授業は、先生が中国の方であることに加え、先生の実験の経験もお聞きすることができ、大変説得力のある授業でした。しかし、自分の中で、そのようなことが、本当に中国で起こっているのか? 将来ビジネスパートナーになるであろう、中国の青年はどのように感じているのだろうか? 日本人である自分がそのような中国を見れば、どのように感じるのだろうか? など、ますます、中国を、自分の足で歩き、この目で見てみたい、と思うようになりました。そのようなときに、今回の中日韓青年交流事業のことを知ったのです。

ここでは、その中日韓青年交流事業で一日本人であり、一アジア人であり、一青年である私が、初めての中国に足を踏み入れ、日本、中国、韓国の学生との交流の中で得た経験と感想を書きたいと思います。そして、最終的に、これからの東アジアの展望について僕が感じていることを述べたいと思います。

### 1. 中日韓青年交流事業とは

この事業は、もともと、2007 年に、中国の温家宝首相が提案され、中国の天津で初めて開催されました。その後、2008 年は、東京、2009 年はソウルで開催され、今年 2010 年は再び中国の北京で開催されたのです。この事業の目的は、将来、東アジアを支える中国、日本、韓国の各若者たちが一堂に集まり、同じ時間を共有し、たがいの理解を深めるといふものです。このプログラムは、経済的・政治的協力の前の、もっとより原始的段階である、互いの文化理解を目的にしたものであります。

そして、将来東アジアでビジネスをしたいと考えている私の目的は、この事業を通し、中国を実際にこの目で見る、この足で歩き、これまでの知識を確かめること。さらに、若者世代と意見交換を行うことで、将来、の東アジアについて考えること、そして、中日韓の友情をはぐくむことを目標としていました。

### 2. 北京という都市と山東省曲阜という農地

日本代表団は、まず、北京に到着し、韓国代表団、中国代表団と合流し、その後、孔子の故郷である山東省の曲阜に寝台列車で移動し、そこで儒教文化を中心として学び、3 日間過ごしました。その後の 3 日間はまた寝台列車で移動し、北京で過ごしました。中国大陸というのは、非常に大きいので、北京と山東省の対比が、他の全ての都市と農地の対比と、整合性は必ずしも一致しないと思いますが、ここでは、一日本人青年であります私が、初めて足を踏み入れた中国大陸での北京という大都市と、山東省という農地で思ったことや、驚いたことを書きたいと思います。

まず、北京ですが、第一印象は、東京や大阪と比べ、建物の高さは大変高く、また、夜は、ライトアップなどが非常に豪華な印象を受けましたが、ほぼ、日本の大都市と同じような印象を受けました。舗装された

道路や、そびえたつ建物などがそうさせたのでしょう。

しかし、その地で過ごしていくにつれ、本当の北京を垣間見ることが出来ました。まず、未来的な建築物がある中、大変古い建物が道路を挟んで立っていたりしました。現在、中国は、とても大きな変革の最中にあります。なので、北京では、そのような建築物が未だに雑居している状態なのでしょう。交通面では、バスや地下鉄を始め、大変発達しており、何不自由ありませんでした。日本との違いは、社内の人々の声が大変大きく、携帯も使っている人がたくさんいたことに驚きました。それと、北京は、昼夜問わず、人が大変多いという印象を受けました。また、霧のようなものが常にかかっており、環境は良いものとはいえませんでした。食事面では、世界の首都がそうであるように、北京には色々な地方の食べ物がそろっていました。私からすると、皿の洗い方や、濡れている皿、虫の多さなど、衛生面を懸念するような様子でしたが、味は、大変美味しく、量も多く、値段も合理的だと感じました。衛生面でも一つ大きな違いは、トイレです。日本では約70%のトイレにウォッシュレットが普及しており、都市などでは、きれいなトイレが多いですが、北京では、紙が無かったり、座るタイプのものがほとんどなく、また、かなり汚いトイレがほとんどだったという印象でした。これも、発達の最中にいる中国なので、改善されるのはもちろん容易に想像できますが、他の部分に比べ、遅れて発達しているように感じました。

とはいうものの、天安門広場や故宮、頤和園の大きさや、素晴らしさには感動し、頤和園に至っては、本当に景色が素晴らしく、この先ほとんどの世界遺産を見ても驚かないような、強い感動を覚えました。

北京は、急速な発展途上なので、かなり先進的な部分があれば、かなり発達途上な部分もあると感じました。発展の過渡期で、そこにはまだまだ多くのインフラをはじめとする需要が存在し、発展をものすごいスピードで成し遂げようとしている様子を垣間見ることができました。

山東省には、寝台列車で移動しました。その際驚いたのが、糞尿を、列車から落としているということでした。そして、現地の農民たちも、線路の近くで用を足しているのを見て、大変驚きました。また、大変多くの人々が、利用し、移動していることにも驚きました。寝心地は悪くなく、食堂車もあったので、不自由はありませんでした。その多くの人々の利用状況からも見てとれるように、大きな中国で、この寝台列車は都市と地方を結ぶ、大変重要な移動手段なのだということが実感できました。

山東省では、その北京との違いに驚かされました。郊外の建築物は、自分で作ったレンガのものが多く、人々はほとんど上半身裸で農作業に従事していました。市街地においても、上半身裸のひが多く、そうでない人は、シャツをおなかだけめくっていました。交通は、電動車が多く見られました。京都でもあの電動車は流行るだろうな、と感じるとともに、リサイクルの一環として使われていることを知り、環境への配慮にもつながっている、世界が見直すべきものであると感じました。道幅は大変広かったですが、信号はほとんどなかったです。食事は、山東料理と呼ばれるものが多く、味はすこししょっぱい印象でしたが、香料が効いており、大変美味しいものもありました。ここでもトイレには、大変驚かされました。ドアも紙も無く、水が溝に流れており、それを壁で隔てたようなトイレがありました。他の人から丸見えなのです。初めは、どういう風にしていいのかわからなかったのですが、他の日本人に相談しましたが、わからず、結局中国の代表団の人に聞きました。都会ではありえないが、田舎ではよく見られる光景だと説明され、本当に日本との違いを感じました。実際に試したのですが、自分が男だからでしょうか、それほど悪くなく、むしろ友達と一緒にしている感覚で、もちろん恥ずかしかったのですが、どこか、思春期のころ友達と一緒に立ち小便をした感覚に似ており、興味深かったです。

また、北京出身の学生と山東省出身の学生を見ると、やはり、見た目の雰囲気も異なり、山東省出身の学生のほうが、質素なイメージを受けました。しかし、もちろん北京の人にも親切でしたが、山東省の人々は、本当に親切で、いつも笑顔で会話してくれたり、手伝ってくれたり、本当に涙が出るほどの温かさを持っていると思いました。そのような点は、本当に、今の若い世代の日本人も彼らから学ばなければならないと思います。

まだまだ都市に比べ、教育や、土地開発の遅れを感じましたが、人として人情や優しさ、温かさは、僕がこれまでに会った人々の中で、もっとも高水準にある場所である、と感じました。そして、開発が進んでも、その素晴らしい人間性を失ってほしくないと思いました。

ここでは大都市である北京と、農地である山東省という土地を見てきました。もっとも強く感じたのは、中国は土地が広いので、その地、その地に異なった文化があること。そして、どちらも発展の最中にあるということでした。なので、中国を考える時には、省ごとに分けて考え、その特質を考えないといけないと思いました。

### 3. 文化的相違

ここでは、この事業を通して、私が感じた、中国、韓国との文化的相違点について述べたいと思います。文化の定義自体難しいものですが、ここでは、青年交流によって、私が得た、その国々の青年の性格的文化

を中心に述べてみたいと思います。

まず、第一印象を考えると、韓国人は、大変社交的だという印象を受けました。すぐに、自己紹介をし、合流後の夜行列車の中でも、日本人と韓国人が基本的に一緒にお酒を飲んだり話したりしていたる、韓国人と中国人がよく話していたように思えます。ポップカルチャーにおいて、両国で活躍している歌手の話や、漫画などの話など、若い世代ならではの近づき方があったように思います。対して中国は、どちらかというとなかなか印象を受けました。ファーストコンタクトの時も、急に距離を縮めるのではなく、ゆっくりお互いのことを知りたい、というような感じでした。しかし、話し始めると、みんなとても親切に接してくれ、食べ物なども共有してくれたりしました。そして、自分を犠牲にしても、みんなをガイドしたり、補助したりしてくれました。このような絆の強め方に違いがあるように思えました。

また、強く印象的だったのは、お酒の飲み方です。韓国の人々とは、お酒とその時に行うゲームを通して仲良くなれたように思えます。中国の人々は、友情の話や、3杯のお酒を一気飲みするなど、お酒自体での絆の結び方をするように感じました。

**International human resources management** を考える上で、文化的相違点を測る時に考えられる、集団行動度と、危険の回避度についても考えていきたいと思います。集団行動度は、韓国は大変高いと感じました。常に、集団を意識し、独特の厳しい年功序列を基本とした、統率のとれた行動を重んじていると感じました。なので、同じように集団の雰囲気や重んじる日本と類似していることにより、「空気が読める」と多くの日本人が感じていたように思えます。一方、中国側はというと、どちらかという、個人的に動くことがあるというように感じました。集団行動よりも、より、自分の感情に正直で、みんなと動くよりも、自分一人でも行動することが平気できるというように感じました。なので、時には、場の雰囲気を壊してしまう結果になりがちですが、それはより正直な気持ちの表れなのだと、理解することが出来ました。

次に、危険の回避度ですが、これは、日本人が最も高いと感じました。物事に非常に慎重で、危険と感じると、すぐさまやめていました。また、韓国も同じようなもので、例えば、シャワーの水が合わないと感じると、飲み水をシャワーとして使用するようにしたりしていました。こういった反応も日本と近いように感じました。一方で、中国側は、危険回避度は低いように思えました。もちろん、自国開催だったのもありますが、例えば、何かしらの禁止が命令されたり、ルールに従うように促されても、自らで考え、それが正しいと思うと、自分の考えを優先し、多少のルールをも構わないという感じでした。どちらがいいということはありません。集団行動にもデメリットがあり、自分の意見を通せないことや、カリスマが生まれづらいうちもあります。ただ、大切なのは、そのような違いがあることを理解することだと感じました。

文化的相違は、日韓は比較的小さい、また、日中はかなり大きいと感じました。しかし、そこで、自分たちと異なるからという理由で否定するのではなく、それはそこのお国柄であり、文化なのだから、お互いそれを認め、互いに互いの文化を尊重することが最も大切であり、東アジア友好での第一歩だと思います。

#### 4. 将来の東アジア

今回の中日韓青年事業を通して、私は大変多くのことを感じ、学びました。そこで、もっとも痛感したのは、日本国内には、メディアや、元も子もない噂のせいで、中国や韓国への悪いステレオタイプがあるということです。韓国はもともと短期留学等で、その文化理解は多少なりとも出来ていましたが、中国は、人生で初めて足を踏み入れました。僕は、もっと、日本人のことが嫌いな国で、もっと、街並みも悪く、衛生も良くなく、みんな自分勝手に、まだまだ発展途上の国だと周りから聞かされてきました。しかし、実際にこの目で見、耳で聞き、鼻で臭い、口で味わい、肌で感じ、足で歩いた中国はまったくそのようなものではありませんでした。確かに、日本のことが嫌いな人もいられるでしょう。しかし、僕が出会った、街行く人や、参加者には、そのような人はいませんでした。むしろ、日本人ですか？と近づいてきて、流暢な日本語で話してくれる方もいました。店員さんも含め大変親切で、本当に人の優しさを感じました。そして、想像以上にきれいな国で、発展しており、自分に正直で、すさまじい発展の最中にある国でした。そして、僕はその未来に大きな可能性、つまりアジアが世界で胸を張ることのできる未来を見てとることが出来ました。第2次世界大戦時は、日本が、アジアの発展の必要性を説き、武力を行使してでも、アジアを共栄させようと尽力しました。次は、経済力で、中国や韓国、そして日本が協力し、アジアの発展に貢献するべき時が来ると感じました。そして、若者世代を見る限り、交流は可能であるし、僕のように、深い絆を結ぶことが出来たのですから、未来は大変明るいものだと思います。必要なことは、周りに惑わされるのではなく、自分自身がその国に行き、生の状況を見、その本当の姿、自分との違い、そしてその素晴らしさに気づくことです。そして、より多くの人々が互いを知り、文化を理解し、尊重し、その上で、経済的・政治的協力が可能になるのです。このままバイアスのかかった、中国の幻影を追っていたのでは、絶対に東アジアには大きな未来はありません。明るい未来のために、その地に実際に行ったり、交流したりし、もっともっと互いの国を知りあうことが大変重要であると感じました。

笑った、驚いた、楽しんだ、戸惑った、怒った、感動した。すばらしい友情、絆を育み、別れるのが辛く

て、泣きに泣いた。

自分の中国に対する見方だけでなく、世界観をも変えるすばらしい事業でした。

## 終わりに

このことに気づかせてくれた、この中日韓青年交流事業に大変感謝するとともに、それに参加するきっかけと、そこで得たことをこのような形で、自分の頭を整理し、アウトプットする機会を与えて頂いた劉徳強先生に大変感謝しております。ありがとうございました。

\*\*\*\*\*

## 【中国経済最新統計】（試行版）

東アジアセンターは、協力会会員を始めとする読者の皆様方へのサービスを充実する一環として、激動する中国経済に関する最新の統計情報を毎週お届けすることにしましたが、今後必要に応じて項目や表示方法などを見直す可能性がありますので、当面、試行版として提供し、引用を差し控えるようよろしくお願いいたします。 編集者より

	① 実質 GDP 増加率 (%)	② 工業付 加価値 増加率 (%)	③ 消費財 小売総 額増加 率(%)	④ 消費者 物価指 数上昇 率(%)	⑤ 都市固 定資産 投資増 加率 (%)	⑥ 貿易収 支 (億ドル)	⑦ 輸 出 増加率 (%)	⑧ 輸 入 増加率 (%)	⑨ 外国直 接投資 件数の 増加率 (%)	⑩ 外国直 接投資 金額増 加率 (%)	⑪ 貨幣供 給量増 加率 M2(%)	⑫ 人民元 貸出残 高増加 率(%)
2005年	10.4		12.9	1.8	27.2	1020	28.4	17.6	0.8	▲0.5	17.6	9.3
2006年	11.6		13.7	1.5	24.3	1775	27.2	19.9	▲5.7	4.5	15.7	15.7
2007年	13.0	18.5	16.8	4.8	25.8	2618	25.7	20.8	▲8.7	18.7	16.7	16.1
2008年	9.0	12.9	21.6	5.9	26.1	2955	17.2	18.5	▲27.4	23.6	17.8	15.9
2009年	9.1	11.0	15.5	1.9	31.0	1961	▲15.9	▲11.3	▲14.9	▲16.9	27.6	31.7
2008年												
5月		16.0	21.6	7.7	25.4	198	28.2	40.7	▲11.0	38.0	18.0	14.9
6月	10.4	16.0	23.0	7.1	29.5	207	17.2	31.4	▲27.2	14.6	17.3	14.1
7月		14.7	23.3	6.3	29.2	252	26.7	33.7	▲22.2	38.5	16.3	14.6
8月		12.8	23.2	4.9	28.1	289	21.0	23.0	▲39.5	39.7	15.9	14.3
9月	9.9	11.4	23.2	4.6	29.0	294	21.4	21.2	▲40.3	26.0	15.2	14.5
10月		8.2	22.0	4.0	24.4	353	19.0	15.4	▲26.1	▲0.8	15.0	14.6
11月		5.4	20.8	2.4	23.8	402	▲2.2	▲18.0	▲38.3	▲36.5	14.7	13.2
12月	9.0	5.7	19.0	1.2	22.3	390	▲2.8	▲21.3	▲25.8	▲5.7	17.8	15.9
2009年												
1月				1.0		391	▲17.5	▲43.1	▲48.7	▲32.7	18.7	18.6
2月		(3.8)	(15.2)	▲1.6	(26.5)	48	▲25.7	▲24.1	▲13.0	▲15.8	20.5	24.2
3月	6.1	8.3	14.7	▲1.2	30.3	186	▲17.1	▲25.1	▲30.4	▲9.5	25.5	29.8
4月		7.3	14.8	▲1.5	30.5	131	▲22.6	▲23.0	▲33.6	▲20.0	25.9	27.1
5月		8.9	15.2	▲1.4	(32.9)	134	▲22.4	▲25.2	▲32.0	▲17.8	25.7	28.0
6月	7.9	10.7	15.0	▲1.7	35.3	83	▲21.4	▲13.2	▲3.8	▲6.8	28.5	31.9
7月		10.8	15.2	▲1.8	(32.9)	106	▲23.0	▲14.9	▲21.4	▲35.7	28.4	38.6
8月		12.3	15.4	▲1.2	(33.0)	157	▲23.4	▲17.0	▲2.05	7.0	28.5	31.6
9月	8.9	13.9	15.5	▲0.8	(33.4)	129	▲15.2	▲3.5	10.6	18.9	29.3	31.7
10月		16.1	16.2	▲0.5	(33.1)	240	▲13.8	▲6.4	▲6.2	5.7	29.5	31.7
11月		19.2	15.8	0.6	(32.1)	191	▲1.2	26.7	10.0	32.0	29.6	34.8
12月	10.7	18.5	17.5	1.9	(30.5)	184	17.7	55.9	9.7	-44.6	27.6	31.7
2010年												
1月				1.5		142	21.0	85.6	24.7	7.8	26.0	29.3
2月		(20.7)	(17.9)	2.6	(26.6)	76	45.7	44.7	2.5	1.1	25.5	27.2
3月	11.9	18.1	18.0	2.4	26.3	▲72	24.2	66.4	28.1	12.1	22.5	21.8
4月		17.8	18.5	2.8	25.4	17	30.4	50.1	21.3	24.7	21.5	22.0
5月		16.5	18.7	3.1	25.4	195	48.4	48.9	29.3	27.5	21.0	21.5
6月	10.3	13.7	18.3	2.9	24.9	200	43.9	34.6	8.3	39.6	18.5	18.2
7月		13.4	17.9	3.3	22.3	287	38.0	23.2	12.8	29.2	17.6	18.4
8月		13.9	18.4	3.5	23.9	200	34.3	35.5	21.2	1.4	19.2	18.6

- 注：1. ①「実質 GDP 増加率」は前年同期（四半期）比、その他の増加率はいずれも前年同月比である。  
 2. 中国では、旧正月休みは年によって月が変わるため、1月と2月の前年同月比は比較できない場合があるので注意されたい。また、( )内の数字は1月から当該月までの合計の前年同期に対する増加率を示している。  
 3. ③「消費財小売総額」は中国における「社会消費財小売総額」、④「消費者物価指数」は「住民消費価格指数」に対応している。⑤「都市固定資産投資」は全国総投資額の86%（2007年）を占めている。⑥—⑧はいずれもモノの貿易である。⑨と⑩は実施ベースである。

---

出所：①—⑤は国家統計局統計、⑥⑦⑧は海関統計、⑨⑩は商務部統計、⑪⑫は中国人民銀行統計による。